

大通公園を望む窓辺から

誤嚥性肺炎

常任理事 生駒 一憲

平成29年の人口動態統計で我が国の死因を見ると、1位から順に、悪性新生物、心疾患、脳血管疾患、老衰、肺炎、不慮の事故、誤嚥性肺炎となっている。誤嚥性肺炎は死亡総数の2.7%で少なそうに見えるが、高齢者に限ってみると決して無視できない数値である。肺炎患者の約7割が75歳以上の高齢者で、また、高齢者の肺炎のうち7割以上が誤嚥性肺炎であるとされている。平成29年の人口動態統計からは死因として、肺炎とは別に誤嚥性肺炎が項目立てされており、このことから誤嚥性肺炎の重要性をうかがい知ることができる。誤嚥性肺炎を引き起こす嚥下障害の原因の多くは脳卒中であるが、それ以外に認知症やサルコペニア等も原因となり、さらに高齢というだけでも誤嚥のリスクは増加する。つまり、地域・家庭で生活する高齢者において、誤嚥を防ぐことは非常に重要である。

私が代表を務める「のみこみ安心ネット・札幌」では、高齢者が家庭で安全に食事ができるような地域での体制づくりを目指して活動している。研修会を開催するほか、食支援のサポーターやコーディネーターの養成も行っている。これらは超高齢社会での地域活動として有用であると考えている。昨年12月8日に札幌で開催された「日医生涯教育協力講座セミナー 超高齢社会における高齢者のトータルケア」では、これについての講演を副代表からしていただいた。今後、摂食嚥下障害およびそのリハビリテーションに対する理解がなお一層進み、誤嚥性肺炎が減少することを願っている。

最後に、別団体の主催ではあるが、本稿の内容と関連が深い「第19回摂食嚥下リハビリテーション北海道地区研修会」が5月11日に札幌で開催される。多数の参加をお願いしたい（事前登録が必要。ホームページ <https://ec-pro.co.jp/enge19/>）。



マリア・カラス

常任理事 後藤 聰

年末、年始の休みに、マリア・カラスに関する本をいろいろと読む機会があった。“マリア・カラス聖なる怪物”といった5,000円を越す高価な厚い本もあった。ただ、これは正統派のまっとうな評伝である。

一方、夫が書いたのだが、言い訳ばかりに終始している“わが妻マリア・カラス”というのもあり、さらには、“わが敵マリア・カラス”という恐ろしげな本もあった。これは、テナーである夫をカラスに奪われた妻が書いた本である。カラスはそのテナーと最後のジョイントコンサートツアーを日本で行っている。確か札幌の厚生年金会館だったと思うのだが、鑑賞した覚えがある。あのホールでは、家族でピンク・レディーを観たこともあった。

そういえば、カラスが十八番の“トスカ”を演ずるといっているので、東京か横浜まで行ったが、案の定キャンセルされて、カバリエが代役をこなした記憶もある。ただ、代役がカバリエだから立派なもので、10年くらい前には、ゲオルギューの“椿姫”を購入したら、彼女がキャンセルし、さらにその代役が1幕で不調で、待機していた代々役に代わったということもあった。悔しいのは、予定されていた次の“椿姫”は、ちょうど“マノン”出演のために来日していた、ネトレプコが代役として歌ったと後で知った。あの頃のネトレプコは今ほど太ってはいなくて、可愛く、美しかった。

興に乗って、あのゼフィレリが作った“永遠のマリア・カラス”などという、珍品としか言いようのない映画まで、あさってしまった。

リマスターされたCD全集も購入してかなりのオペラを聞き直したが、いまだに本当は、カラスのすごさというのは私には理解できないでいる。少しザラザラとした、声が耳に付くばかりだ。唯一、理解できたのは、痩せるためにサナダムシを自分の腸管に飼育していたのは、どうも本当らしいということだけだった。